ステンカ・ラージンの反乱

尼　川　創　二

はじめに

ステンカ[1]（ステパンの愛称）・ラージンは生年不詳で、ロシア人とトルコ人（女）の混血児だが、ツァーリのアレクセイ帝と同じころ、つまり１６２９年前後に生まれたという話がある[2]。彼はドン川下流のチェルカッスク（ドン・コサックの中心地）の近くのジモヴェイスカヤ村の富裕なコサックであるチモフェイ・ラージン（ひとりでドンに来てコサックになる[3]）の息子である[4]。

コサックとは、初めは中世後期にロシア平原南部の辺境の防衛に雇われたトルコ系の戦士（コサックは英語で、ロシア語ではカザーク、カザークとはもとをたどればトルコ語で、自由人・剛勇者の意味という）であったが、１６世紀にはロシアやウクライナから逃亡農民や下人、それにクリミア・ハーン国からのスラヴ系逃亡奴隷が多数加わり、彼らが主になったという。コサックは、周辺国家や遊牧民から身を守るため、ドン川、ドニエプル川、ヤイーク（現ウラル）川、そして北カフカースのテーレク川の河畔などに、それぞれ自治的な軍事＝政治組織をつくった。これはコサック全員の平等を建前とし、集会で首長（アタマン）が選ばれ、裁判や遠征の決定もそこで行なわれたコサック社会で農耕が行なわれるのは１７世紀末からで、彼らは初め漁労と狩猟、次いで牧畜に従事し、また次第に略奪的遠征より生活の資を得た[5]。農業は、農奴生活を思い出させるものとして、「死刑の脅し」で禁じられたのである[6]。

ラージンは、１６６７年に、人口増大し、生活に困窮した、当時のドンの下層コサック[7]（飢饉の状態にあったともいわれている[8]）の先頭に立って、まずヴォルガ川で商船を襲い、翌年、カスピ海に繰り出して西岸と南岸をあらし、報復に来たペルシア大艦隊に奇跡的に大勝利し、その後自軍の勢いが弱まると、アストラハンに帰り、市民から猛烈な歓迎を受けた。彼は「その断固たる決意、機略縦横の才、尽きざる活力」などに多くの者が瞠目せざるを得ない男盛りの戦士であった。彼はまた、しばしば手に負えない、強烈な情熱家であった。１６６９年、ツァーリは、反乱者きどりの者を抑え込むようコサック長老K.（カー）ヤコブレフ[9]に命じようとして、特使Г.（ゲー）エヴドキーモフをチェルカッスクに送り込んだところ、ラージンがそのエヴドキーモフを、ツァーリではなく大貴族がよこしたと非難したのち、ラージンの部下たちが彼を暴行の末、ドン川に投げ込んだ。これによってラージンは、公然たる反乱の第１歩を踏み出した

のである。１６７０年３月、ラージンのもと、約７０００のドン・コサックと自主的に加わった数百のザポロージエのコサック[10]が、ドン川からヴォルガ川に向かう途中のパンシンに集まった。この地域はコサックの他、１５５２年のカザン・ハーン国の滅亡によって知られるように非ロシア系少数民族の多いところである。ラージンは感動的なスピーチを行なった。彼が非難したのは、民衆思想のなかで昔からしばしば「帰りくる救世主」と見なされたツァーリではなく、大貴族であった。これはラージンの人気を高めた。もっとも、彼が本心からのツァーリ賛美者であったかどうかはさだかではない[11]。

アストラハンを陥落させたラージンは、１６７０年７月、モスクワを最終目標としてヴォルガ川上流を目指した。サラトフとサマラの町は、これに応じて、下層階級が蜂起し、城門を開いた。ラージンの使者は、扇動的な宣伝文句（その効果は大きく、官憲はそれを「魅惑の書」と呼んでいた）をばら撒いた。ラージンはまた、自分のある荷船に、たまたま当時死んだ皇太子と同年輩の者を乗せ、国賊を退治するために同船しているのだと主張した。別の荷船には、ツァーリの不興を買い、遠くに幽閉されていた総主教ニーコンの名をかたる別の男を乗せていた[12]。

１６７０年の晩夏が、ラージン成功の絶頂だった。だが、政府も怠けていなかった。反乱鎮圧の総司令官にЮ（ユー）.ドルゴルーキー公が任命された。シンビルスクが攻防の焦点であったが、そこの地方長官はИ（イー）.ミロフラフスキー公は、守備隊を確実に掌握していた。だが、政府側で最も期待が大きかったのはЮ（ユー）.バリャチンスキー公の軍隊であった。その軍隊は、通常の騎兵と銃兵の他に、「ヨーロッパ風に訓練され、大型の拳銃と大砲を持った、ロシア軍の精華ともいうべき、ツァーリ直属の最強の連隊」を引き連れていた。一方、ラージンの軍隊は、恐ろしい速さでヴォルガ川流域をわがものにしたときの軍隊ではなかった。かつてはコサックと銃兵（投降者）の強力な軍隊だったものが、今や農民、少数民族、それに船頭、囚人、浮浪者らが加わって、すっかり弱体化していた。それらの人々は、最初の突撃では元気でもすばやく勝利をものにできないと簡単に失望してしまうのだった。ラージンも負傷し、一命を落とすところであった。

１０月４日は、終日、血みどろの激戦が続いた。全軍が壊滅状態に陥ったなかでラージンらコサックは、農民や少数民族が死ぬのを見捨てて船の停泊地に殺到し、逃げた。大多数のものは捕らえられ、処刑されるか流刑となった。死者の数は、数万人に達したと思われる。

ラージンは、ヴォルガ川を下り、ドン川に向かった。体力の回復を図り、１６７１年２月、自軍の残兵を集め、ヤコブレフらコサックの長老を倒すため、ドン川下流の

チエルカッスク（コサック本営）に船を進めた。チェルカッスクでは強力な王党派がラージンの入城を阻み、ラージンはカガリニクに退却した。

ヤコヴレフはドン川本営の伝統的な独立を大切にし、どんな権力者からも指図を受けることを拒否してきた。ツァーリは、反徒粉砕のために、軍隊を派遣する決意をし、そしてヤコヴレフは、ついに政府に協力する道を選んだ。彼は部下を集め、カガリニクに向かい、あらゆる抵抗を打ち砕いて、ラージンと弟フロールに足かせをはめ、チェルカッスクに送った。

ラージンはそこからモスクワへと護送された。アレクセイ帝はラージンを恐ろしい拷問にかけた。ラージンは無言で耐えた。１６７１年６月６日、赤の広場に引き出された彼は、右腕が肘のところで、左足が膝のところで切断された。そして手斧で頭が切り落とされた。彼の口から悲鳴はついに聞かれなかった。最後に彼の頭部と手足は杭の上に載せられ、胴体は犬に食わされた。弟のフロールの死刑は、５年間の投獄を経て、執行された[13]。

ラージンは、１７世紀と１８世紀のロシアの４大反乱の指導者（いずれもコサック）のうち「最も勇敢で、最も光彩陸離たる人物」であり、民衆から「最も敬愛され[14]」、他のどんな民衆的英雄よりも数多く歌や伝説の主題になっているという。彼は、ある人々の目には、自分の命を捨てて貧民を救い、永遠の黄金時代を造り出そうとする、キリストのような殉教者として映ったという[15]。

このようなラージン反乱にどんな問題点があるのか。小さな問題点は限りなくあるが、ここでは次のような点に的を絞ろう。第１章では、ラージンの個人的な問題をいくつか取り上げてみたい。「長兄イヴァン」について、「ペルシアの姫」について、「虐待」された幼児について論じる。次に、第２章では、ラージンの反乱の全体像に関して述べよう。まず、ラージンの反乱の本質は何なのか。旧ソ連の指導的学説がいうように、「農民戦争」なのか。また、政府軍はそれまでとどう異なっていたか。西欧から伝わった軍事教練はどのような効果を表したか。以上の点を考察してみたい。私はこれまで現代史の分野のみを扱ってきたが、古いところにも関心を持つようになり、慣れぬながら、ラージンに取り組んでみた。

（１）「ステンカ Стенька」は、「スチェニカ」としたほうが原音に近いであろうが、ここでは，慣用を考えてこのようにした。なお本稿説明文では父称のアルファベットは省略する。

（２）一般に彼の生年は「1630年？」とされている。また、いうまでもなく、アレクセイ帝の息子ピョートル大帝によって1700年に西暦がロシアに伝わるまで

は、ロシアではビザンティン帝国から伝えられた宇宙開闢紀元（天地創造を西暦紀元前5508年と想定したもの）が使われていた。

（3）軍事面で名をなすが、ステンカの成人前に死去。B. M. Соловьев. *Анатомия русского бунта. Стенка Разин, мифы и ральность*. M., 1994. C.41. 等を参照。

（4）ラージンの生涯については、米国の研究者 P. アヴリッチの小気味の良い書 P.Avrich, *Russian Revels, 1600-1800*, New York, 1976, pp.50-115. P. アヴリッチ、白石治朗訳『ロシア民衆反乱史』彩流社、2002年、59－131ページを特に参照した。

（5）田中陽児・倉持俊一・和田春樹編『世界歴史大系　ロシア史　1』山川出版社、1995年、291－293ページ。

（6）Соловьев. *Указ. соч.* C.35.「死刑の脅し」まではっきりと書いているのは、私の知る限り、この本だけである。このほか、ドンで農業を続けたい逃亡農民は、打たれ強奪されたのち、彼らが農業をやりたいと思う地域に帰るようにとの命令がコサック指導部から出されている。M. Khodarkovsky, 'The Stepan Razin Uprising: Was It a "Peasant War"?' *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas.* B.42, H.1, 1994, p.4.

（7）1640年代初期のドン・コサックは約4000人だったが、1670年代初期には約1万人に増えた。*Ibid.*, p.5.

（8）*Ibid.*, p.8.

（9）ラージンの教父（洗礼父）。

(10) ウクライナのドニエプル川下流域のコサック。

(11) アヴリッチは、ラージンがツァーリを心から信頼していたように書いている（Avrich, *op. cit.*, p.112. 白石訳127－128ページ）が、これには大きな疑問がある。

(12) ラージンはニーコンに特使を送り，もし協力すれば元の総主教の地位に復帰させるという約束を与えようとしたが、ニーコンは特使と会うことを拒否したという。しかし、ニーコンとは対立する旧教徒（分離派教徒）が大量にラージン派に参加しなかったにしても、それは彼がニーコンを支持したこととは無関係である。国境地方では分離派がまだ、社会的抗議の主力になっていなかったのである。Avrich, *op. cit.*, pp.95-96. 白石訳、110－111ページ。

(13) *Ibid.*, pp.112-113. 白石訳、126－128ページ。フロールが死刑延期になったのは、彼が略奪品と扇動文書の隠し場所を主張したためだ、とアヴリッチは書いている。

(14) *Ibid.*, pp.120-121. 白石訳、136－137ページ。

(15) *Ibid.*, pp.121. 白石訳、137ページ。

1．ラージンの個人的問題

(1)「長兄イヴァン」

１６６５年、ポーランド戦線でドルゴルーキー公のドン・コサック分遣隊長（これがステンカ・ラージン長兄のイヴァンといわれてきた）が絞首刑になり、一つにはこれが専制政治に対するラージンの復讐の念を燃え上がらせたといわれている。土肥恒之の『ステンカ・ラージン』では、こう書かれている。

「父親チモフェイの死後、ラージン家の家長になったのは兄のイヴァンであった。彼は強情で、誇り高く、そして恐れを知らぬコサックであった。コサックたちは絶えず辺境で軍役を担い、遠征に参加していた。また絶えずそれに備えていなければならず、勝手な行動は厳に慎まなければならなかった。イヴァン・ラージンもまた，何度も遠征に出かけたが、ときに承諾を得ずに勝手な行動に出ることがあったようだ。１６６５年のことである。彼はロシア軍の司令官ユーリー・ドルゴルキー公の許可を受けずに、自分の部隊を休息のためにドンに連れ戻した。これが厳しいドルゴルキー公の耳に入った。イヴァンは捕らえられ，連隊の陣地に護送された。イヴァンと仲間のコサックたちの行動は義務放棄と見なされたのである。見せしめのための死刑が宣告され、イヴァンは大勢のコサックの前で絞首刑にされた。おそらくその場にステパンもフロールもいた。二人は兄の処刑を目撃したのである[1]」と。いかにも見てきたかのように、すらすらと書かれてある。注はこの書にはつけられていないが、そのほかの史料もない。

『世界ノンフィクション全集第７巻』所収の金子幸彦著「ステンカ・ラージン」には、「兄のイヴァンもすぐれたアタマンであったが、カザーク［コサック］の自由を守って、１６６５年にとらえられ、モスクワで死刑になった[2]」とある。これもまた注も史料もない。なお、第７巻の解説者中野好夫により、ラージンの乱については、「適当なノンフィクション的読みものがなく、フィクションはあっても、事実的真実の点で遺憾があるという専門家の意見で、結局ロシア文学研究家の金子幸彦氏に書下ろしてもらうことになった[3]」とのことわりがある。

フランスの作家P.メリメはロシアに関する著作も多いが、「ステンカ・ラージン」『メリメ全集第５巻』のなかで、歴史家ニコライ・コストマーロフ[4]の書を読んで、ステンカ・ラージンの長兄（名前は明らかにされていない）が見せしめのため絞首刑に処され、ステンカとフロールが「おそらくその処刑を目のあたりに見て復讐を誓ったこ

とだろう[5]」と述べている。

ソ連の作家A.（アー）サハロフはラージンについての小説の中で、このイヴァンの話を取り上げ、それがまるであったかのように描いている。しかし、最後には「後年、彼［ラージン］は、この時のことを一言も話さなかった。人々はコサックたちが真実を語ったのか、それともこれは単なる噂であったのか誰も確かなことは知らなかった[6]」との注目すべき一節を書きつけている。

B.（ヴェー）ソロヴィヨフは、１９８８年刊行のE.（イエー）チスチャコヴァとの共著『ステパン・ラージンと彼の戦友たち』では、同様のイヴァン・ラージンの逮捕と処刑の様子が描かれている[7]。しかし、ソロヴィヨフは、２６０点もの研究書・論文に当たっているとする、１９９４年刊行の『ロシアの一揆の解剖学－ステパン・ラージン　神話と事実』の冒頭でステンカの兄（イヴァンとはどこにも書いていない）の話を持ち出す。話の出典は、１６７１年と１６７４年に外国人の手になる二つの書類だけである。ここには、確かにあの、ドルゴルーキー公が長兄を絞首刑にする話が書かれている[8]。しかし、当時のロシア人による同じような文書あるいは民謡はない。ここでソロヴィヨフが不思議がるのは当然といえる。長兄がいたというのは根拠薄弱な話ではないのか。[9]

アヴリッチは『ロシアの反逆者たち』（白石訳『ロシア民衆反乱史』）のなかで、ステンカ・ラージンらの反権力の動機は「謎に包まれたまま」であるとし、ある史料（これまた外国人による史料）によれば、ラージンは逮捕された後、彼の兄の処刑（１６６５年）が自分の反乱の動機、つまり専制政治に対する復讐の念を燃え上がらせたものだったといっているが、この話は「史料によって裏づけができない」としている。実際、ラージンの兄の存在そのものさえ、断定できない、とアヴリッチはいう。さらに、彼の言葉によれば、同時代の記録を見ると、ラージンという名前のドン・コサックは何人も出てくるが、兄の立場に合致するような人物は見当たらないという[10]。アヴリッチを信じるならば「長兄イヴァン」はいなかったことになる。

（２）「ペルシアの姫」

さて、ラージンが情婦のように連れ歩いた美しい「ペルシアの姫」は、民謡に唄われているように、実際にラージンの手によってヴォルガ川に投じられて死んだのか。１６６７年春、そのころ４０歳前後であったラージンは、男盛りの戦士であった。冬が去り、隊商やコサックの船が出現しつつあったころ、初めて冒険に乗り出したラージンが、ドン川のヴォルガ川にむけて屈曲している村々で、ドン川上流の、略奪と興奮を渇望していたコサックの群れ２０００人を集め、カスピ海遠征のために船団をそろえていた。ラージンの計画は、ヴォルガ川を河口まで下り、カスピ海北岸にそって

ヤイーク川に達し、秋と冬をヤイーツク（現ウラリスク）で過ごそうというものであった[11]。

しかし、チェルカッスクの王党派コサックがこの計画をモスクワに伝えた。政府は機先を制することにし、ラージンがヴォルガ川に入ることを阻止せよ、との命令を出した。だが、地方長官たちはラージンを甘く見ていた。ツァリーツィン（現ヴォルゴグラード）は焼き尽くされた。モスクワは驚いて、チェルカッスクのコサック本営を頼り，首長ヤコヴレフにいろいろと命じた。ヤコヴレフはこれを無視し、活力旺盛なラージンをヴォルガ川とカスピ海に遠ざけ、ドン川下流のチェルカッスクに対する攻撃を避けたかった。また、コサック本営の独立を守る立場にある以上、政府の命令に屈従することはできなかった。ラージンがコサック社会の寡頭政治に対する脅威になって初めて、ヤコヴレフはラージンに対する積極策を取り出すのである。

他方、１０００人を超えるラージン軍は、自分らの本陣からヴォルガ川に向けて出発し、幸運にも、ロシア商船の大護送団に出会い、襲撃した。護送団は高価な船荷のほかに流刑する政治犯集団を引き連れていた。コサックは、待ち伏せして不意を突き、すぐさま敵を圧倒し、抵抗するものはヴォルガ川に投げ込み、ほかは「自由なコサック」になることを勧めた。ヴォルガ川をさらに下ったラージンは、その後の武装船団を潰走させ、アストラハンからカスピ海を航行し、東のヤイーク川へむかった。次々と追跡してきた銃兵隊も、寝返るか、屈服した。彼らは、給料の未払いに不満を持つか、コサック反乱者と同じ階層の出身であったため、戦闘意欲が著しく欠けていたのである。ラージン軍は、姦策で落としたヤイーツクで秋と冬を過ごした。１６６８年３月、ラージン軍は、ヤイーク川からカスピ海に出て、ペルシア領のカスピ海東岸と南岸を荒らしまわり、やっとのことで戦利品と捕虜を船に積んだ。

ペルシアはマーメド･ハーンの指揮下に３７００の兵からなる大艦隊を編成し、迫ってきた。１６６９年６月、カスピ海で両軍は激突した。しかし、ペルシアの動きの遅いガレー船は、ラージン軍の平底船にかなわず、ここでもまたコサックが驚異的な勝利を収めた。ラージンは多数の捕虜をとり、そのなかにはマーメド･ハーンの息子シャバルダも含まれていた。しかし、コサックのほうも疲れ切っており、翌月、ラージンはカスピ海南部の野営地を去り、名声と戦利品を手に、ヴォルガ川にむけ出立した。

１６６９年８月、ラージン軍はヴォルガ川の河口近くでカスピ海における最後の海賊行為を行なった。彼らはペルシア商人の船に乗り込み、ペルシア王からアレクセイ帝への贈り物であるサラブレッド数頭を含む船荷を収奪した。数時間後、アストラハンの地方長官И（イー）. プロゾロフスキー公が、ラージンの接近を耳にし、С（エス）. リボフ公に迎撃するよう命じて、艦船を向けた。しかし、ラージンには戦いの意志はなく、船の方

向を変え、公海に向かわせた。リボフ公のほうも、ラージンに急使を送って話し合いの解決を図ろうとした。さまざまな戦利品や捕虜を返還するならば、ツァーリの特赦により、無事ドン川に帰してやるというのだった。

ラージンは、外見上はこれに同意した。アストラハンは勝利の行進をして町に入るコサックに大歓迎を与えた。すでに伝説の人となっていたラージンは、海賊としてではなく、無敵の戦士として称賛の的になった。彼は地方長官とかわした約束の一部だけを遂行すればよいと思っていた。彼はすべての船とほとんどの大砲を手元に残していた。ドン川に帰るとき、タタールの地を抜ける際、必要だというのである。ただし、ペルシア人捕虜は全員引き渡している。艦隊司令官マーメド・ハーンの息子シャバルダもそのなかにいた。

前置きが長くなってしまったが、話はこれから「ペルシアの姫」のことになる。「ペルシアの姫」といえば、われわれはすぐ王女を想像してしまうのだが、全くそうではない。せいぜいペルシア国王（シャー）の部下であるマーメド・ハーンの娘であるのかそうでないのかぐらいの問題である。ラージンには情婦か妾のように連れ歩いた女がいた。ソロヴィヨフによれば、彼女がマーメイド・ハンの娘だという証言はたびたび出てくるという。そして、彼女が「ペルシアの姫」と同一人物と考えられているという。しかし、保存されているマーメド・ハーンの息子の帰国を希望する嘆願書には、同じく捕虜になっているはずの娘（彼からすれば姉妹）のことは一切出てこないという。ソロヴィヨフは、この点は「ペルシアの姫」とマーメド・ハーンの娘を同一視する見方に疑問を抱くことを可能にするものであるとしている[12]。

ラージンの乱の始まったころ、ロシア海軍最初の外洋航行船オリョール号（結局反徒により破壊される）のオランダ人船乗りヤン・ストレース[13]によれば、ラージンのそばには「ペルシアの姫」がおり、彼女は「非常に美しく、感じのよい娘」でラージンの「お気に入り」となっており、彼女もラージンを愛していた。彼女はペルシアの艦隊司令官の娘であった。ストレースは、彼女のことを聞き知っただけではなく、ラージンのところで実際に見たのという。ストレースは、自分の体験として、この「姫」の最後の様子を物語る。ラージンは、一日中宴を張り、すっかり酔うまで十分に飲んだ。彼はひどく酔い、船のへりに肘を下ろし、ヴォルガ川をもの思わしげに眺めて、川の霊（女）に、与えてくれた金銀・宝石のお礼をしていないことを詫びると、「姫」のそばに駆け寄り、金色の錦、真珠や宝石で飾り立てた彼女をつかむと、ヴォルガ川に投げ捨てた[14]。

サハロフも同じようなことを書いている。「この美女がどのようにしてコサックの手に落ちたかだれも知らなかった。ある者はステンカがヤイクに近いタタールの村で

彼女を捕らえ、どこへでも一緒に連れ歩いていたと言い、ある者は、この女はペルシア女で、ステンカがスビン島で捕らえたハーンの娘で、シャバルダの姉だと言っていた。ステンカが彼女をだれにも見せず、深く愛していたことは明らかだった」。コサックたちには、これは不満だった。「その日だれかが酔っぱらってこれについてラージンを非難した。ラージンは黙って聞こえないふりをしていた。が、はしけが河の中ほどへ来た時、彼は突然立ちあがって、自分の愛人をつかまえて頭の上に差し上げた」。その後、ラージンは「座席に座って酔眼の涙をぬぐっていた[15]」。

ラージンがいかに粗野であろうと、精神錯乱の発作においてのみ、そのような残酷なことをなしえたと考えなければならない、とソロヴィヨフも述べている[16]。しかし、これまたソロヴィヨフによれば、ストレースの同国人で、当時リボフ公に仕えていたオランダ人L．ファブリツィウスは、違った地域と時期での別の話を伝えている。ストレースがこのエピソードをカスピ海からヴォルガ川への帰還の際のこととしているのに対し、ファブリツィウスは、そのことはカスピ海遠征以前のヤイーク川でのことだと書いている。彼の言葉によれば、カスピ海に出る前に、ラージンは、1年前に捕虜にした「美しい、名門のタタール娘」をいけにえにしたという。ラージンと彼女とのあいだには息子がいた。しかしながら、タタール娘とその息子について[17]、多分この伝説は、ソロヴィヨフがいうように、口頭の国民的創作活動が、いわゆる「ペルシアの姫」と関連付けられた、ロマンチックな反響のひとつなのであろう。

「ペルシアの姫」の物語は、ソロヴィヨフが書いているように、一連の歴史家によっても疑問視されている。K（カー）．ヴァシレフスキーのように、その物語と、昔のノヴゴロドの商人サトコの英雄叙事詩とが良く似ているとしているものもある[18]。ヴァシレフスキーによれば、非常に美しいペルシア女は、おそらく、ラージンに対してなにか罪を犯しており、それで彼は彼に特有の断固さで彼女を殺したであろうということになる。かつて、姦通を犯した女を逆さづりにし、彼女の共犯者を沈めることを命じたように。

ヴァシレフスキーよりはるかに権威のあるロシア史家のコストマーロフは、「ペルシアの姫」についてのストレースの信憑性については疑いを入れてはいないが、「不幸な女捕虜の出来事は」「ステンカの不明瞭で御伽噺のような諸伝説に保存された」と書いている。コストマーロフは諸伝説のひとつを引用している。ラージンらが船に乗っていたときのことである。ラージンは、海の上で、コサックらとトランプをやっていた。彼のそばには「愛人、すなわち捕虜となったペルシアの女」が座っていた。突如、ひどい嵐が生じた。コサックたちはラージンに語った。「海がわれわれに怒り狂っています。海に捕虜を投げてやりなさい」。ステンカは彼女を海に投げた。すると嵐

はやんだ。ここではコストマーロフは、コサックたちの《おやじさん》（＝ラージン）への不平不満を問題としているのであろう[19]。以上のもろもろの話から何らかの結論を出すことは難しい。

（3）「虐待」された幼児

次に、幼児に関する出来事について述べたい。これは、内容（残虐さ）も関係してか、土肥、金子、阿部では触れられていない。しかし、和田春樹の「スチェンカ・ラージンおぼえがき」『農民革命の世界』では、ニコライ・コストマーロフを使っているためか、１６７０年６月、アストラハン攻防戦で「戦闘が終わって、ラージンの裁きにより、市長官プロゾロフスキー公爵以下４４１人が殺された。公爵の１６歳の長男と８歳の次男も城壁に一晩逆吊りにされたうえ、長男は城壁から突き落とされて殺された」と書いている[20]。感想は書かれてない。

プロゾロフスキー自身は厳しい司令官であったらしく、殺されても仕方なかったであろう。しかし、１６歳と８歳の子供にまで「一晩逆吊り」にして、兄のほうを殺すとは。救世主的役割を彼の行動に常に見出そうとする人たちにとって信じられない極悪の行動であろう。どのような事情があったのか。

メリメはこれもコストマーロフを読んだ上で、次のように書いている。ラージンは出発する少し前に、アストラハンの府主教のもとに隠れていたプロゾロフスキー公の二人の息子を連れて来させた。「兄は１６歳で、弟は８歳だった。二人とも城壁の銃眼のあいだで逆さ吊（つり）にされた。小さいほうは、このむごい刑罰の一夜を過ごした後も生きていた。翌朝彼にまだ生気があるのを見たステンカは、彼をなお吊るさせるのを止めさせ、鞭刑を与えた後、その母親のもとに帰らせた。これだけが彼の寛大な処置の例として挙げ得られる唯一のものだったと、わたくしは思う[21]」。

ソロヴィヨフはどう書いているか。戦いが終わり、広場に捕虜になった地方長官プロゾロフスキーと彼の長男（１６歳、戦闘に参加していたのであろう）、官庁と軍隊の幹部が、自分の運命の成り行きを待っていた。判決は満場一致で無慈悲な死刑であった。それは、死刑というよりも野蛮な制裁だった。プロゾロフスキーは、いろいろ問題点を持つ人間だったが、男らしく死んだ[22]。

アストラハンの府主教イオシフの説得に耳を傾けて、ラージンは最初は二人の孤児に慈悲をかけた。兄を連れてくるよう命令して、彼はその若者に死刑について深く尋ねた。おそらく、その返答に何か不満が残ったため、若者の足を縛って（逆さまにして）市壁に吊るすよう命じた。そして、弟が、おそらく慰めようもない母親の面前で同じようにされた[23]。一昼夜たった。兄は死んだが、弟は生き残った。正しいのか、そう

でもないのか、分からないのだが、遠藤周作の『沈黙』に、手足の動かぬよう簀巻にして穴に吊る拷問を行う際、そのままでは即座に絶命するため、耳の後ろに穴をあけて、一滴一滴血が滴るようにする、という箇所があった[24]のを私は思い出した。ということは、弟の方はもしそのような複雑な措置をしていないとすれば、足を上にして吊るされたのではないのではなかろうか。このように書くことは、原史料[25]を無視しているということになりかねない。しかし、私には一昼夜たっての兄弟の生死の差に合点がいかないのである。

（1）土肥、前掲書、96－97ページ。

（2）金子幸彦「ステンカ・ラージン」『世界ノンフィクション全集　7』筑摩書房、1960年、452ページ。

（3）同（「解説」）527ページ。

（4）帝政ロシア期の歴史家。ヴォルガ川の河畔のサラトフに流されて作成した『ステンカ・ラージンの反乱』は、当時の「大改革」時代の青年たちに熟読された。この本は私には入手できなかった。

（5）P. メリメ、江口清訳「ステンカ・ラージン」『メリメ全集　5』河出書房新社、1978年、346ページ。

（6）A.H.Сахаров. *Степан Разин.* M., 1987（最初の発表は1973年）. C.45. 米内哲雄訳、『ステンカ・ラージン伝』たくみ書房、1980年、48ページ。

（7）E.B.Чистякова. B.M.Соловьев. *Степан Разин и его соратники.* M., 1988. C.10-11. 出典は書かれていない。

（8）Соловьев. *Указ. соч.* C.8. ソロヴィヨフは二つの外国人の史料を用いている。*Записки иностранцев о восстании Степана Разина*. Л., 1968. C.75と *Иностранные известия о восстании Степана Разина*. Л., 1975. C.63である。どちらも外国人が直接見聞したわけではない。

（9）ソロヴィヨフは、この本の別の箇所で同じ話をしている（イヴァンの名は出してない）が、出典は同じく外国人の書であり、ロシア人の書ではない。Соловьев. *Указ. соч.* C.41.

（10）Avrich, *op.cit.*, pp.67-68.　白石訳、78ページ。

（11）以下 *Ibid.*, pp.69-75.　白石訳、80－87の各所を参照した。また、金子、前掲論文、452－463ページにやや異なる記述がある。Сахаров. *Указ. соч.* C.54-140. 米内訳、56－142ページは、小説ではあるが、基本的事実はきちんと調べ挙げているようである。

(12) Соловьев. *Указ. соч.* C.63.

(13) 翻訳本である、Я.Я.Стрейс. *Три Путешествия*. M., 1935のC.4に、原本表紙の写しがあり、それによってストレースのオランダ名がJ.J.Struysであることが分かるが、以下ストレースとしておく。

(14) Соловьев. *Указ. соч.* C.59-60; Стрейс. *Указ. соч.* C.201.

(15) Сахаров. *Указ. соч.* C.140. 米内訳、145ページ。金子は彼女をマーメイド・ハーンの娘「ゼイナブ」であり、捕虜になったラージンの部下たちが殺されたのを機に、彼女を初めとしてペルシア人捕虜が川に投げ込まれた、としている。金子、前掲論文、463ページ。

(16) Соловьев. *Указ. соч.* C.60.

(17) *Там же.*

(18) *Там же.* C.61.

(19) *Там же.* C.61-62.

(20) 和田春樹「スチェンカ・ラージンおぼえがき」『農民革命の世界』東京大学出版会、1978年、19ページ。

(21) メリメ、前掲書、367ページ。

(22) Соловьев. *Указ. соч.* C.89-90.

(23) *Там же.* C.90-91.

(24) 遠藤周作『沈黙』新潮社、1966年、192ページ。

(25) 原史料は、*Крестьянская воина под предводительством Степана Разина. Сборник документов.* Том. 1. M., 1954. C.226,252と *Записки иностранцев.* ... C.53だが、何らかの理由で、他の史料が載せられていないように思われる。

2．ラージンの反乱の全体像

（1）ラージンの反乱と社会層

ステンカ・ラージンの反乱（１６７０年－７１年）は、ロシアでは、И.（イー）ボロトニコフの反乱（１６０６年－０７年）、С.（エス）ブラーヴィンの反乱（１７０７年－０８年）、Е.（イエー）プガチョーフの反乱（１７７３年－７５年）の他の３つの反乱と合わせて、「農民戦争」であるとされてきた。農民戦争とは、「封建時代の農民がしばしば用いるもっとも典型的な階級闘争の一つである一揆・暴動の中でも、特にその規模が大きく、勢いも激しくて、個々の領主ないしは何人かの領主たちの力ではどうにもならなくなって、ついに国家権力と対決するようになった、いうならば『内乱』的な様相を帯びた

もの[1]」のことである。この言葉は、西南ドイツを中心に生じた農民蜂起（１５２４年－２５年）をF.エンゲルスが『ドイツ農民戦争』（１８５０年に出した本）と呼んでから特に、普通の農民一揆と区別して使われた。これは、コサックなどではなく農民（特に１６４９年の『会議法典』批准以後、多くの者が農奴に転化しつつあったのだが）という基本的階層を社会変革の主体と見る見方に盲目的に沿っているといっていいくらい忠実なものである。はたしてロシアの諸反乱の根本的性格は農民戦争であるのか。コストマーロフら帝政期の学者は、反乱をコサックのみの責任としていたが、ロシア革命後は農民が主体的に動いたという見方が強まる。

だが、ロシアの大反乱の主体を農民に限定し、コサックの運動を起爆薬のようにしてしまう考え方には、もともと無理があったのではなかろうか。鳥山成人は、１９９５年、「スクルィンニコフは、１９８９年の一論文で、モスクワ包囲軍の分析などをもとに、『ボロトニコフの運動は農民戦争ではなかった』と断言し、カザーク［コサック］の活躍と志向を中心に動乱史をまとめたA.Л.スタニスラフスキーの研究（１９９０年）も、カザークを農民とみなして、『動乱』を農民運動とする考えは『根本的見直し』が必要であるとしている[2]」と書いている。

米国では、P.アヴリッチが１９７６年に、首領をすべてコサックとする４つの反乱を興味深く扱っている。アヴリッチは、ボロトニコフの反乱について「しばしば『農民戦争』として述べられているが、実際は、田舎から出てきて彼に従った者は比較的少なかった」のであり、「ボロトニコフの反乱の主役を演じ、彼を支持した者の大半は、都市の出身者であった。確かな情報には欠けるが、ラージンやプガチョーフの反乱までのロシアの農民は、あまり重要な役割を果たしたとは思えない。また、ボロトニコフの反乱に加わった農民が、すでに農奴制の確立した、農民が弾圧されて悲惨な生活を送っていたロシア中央部から来たとはいえないことも、注目に値する[3]」と述べている。他方、ブラーヴィンの反乱については、「それは、コサック問題の色彩が極めて濃厚であり、農民は明らかに副次的な役割しか果たしていなかった」とし、また「少数民族の役割も小さ」かったこと、他方で、それは「旧教徒を大々的に巻き込んだ最初の大きな反乱」であったとしている。さらに、ブラーヴィンは「指導者として力量不足」であったことも指摘している[4]。

そうなると、アヴリッチは残りの二つ、ラージンの反乱とプガチョーフの反乱に農民的要素とコサック的要素の混在を見るということになるが、アヴリッチがわれわれの当面の論点である、ラージンの反乱における農民的要素とコサック的要素のいずれが大きいと見るかの問題は、はっきりしない。アヴリッチは、「１７世紀ヨーロッパ最大の農民一揆といえるラージンの反乱」といいつつも、「ラージンの反乱では農民

が大きな比率を占めていたが、コサックの役割もまた重要であ」り、「彼らは、反乱の先鋒に立ち、最大の戦力になっていた[5]」と記している。われわれが「はじめに」で取り上げたラージン反乱の内容は明らかにコサック的要素が強いのに、アヴリッチがこうしたどちらつかずの態度に出てくるのは不可思議である。

米国のM.ホダルコフスキーは、論文「ステパン・ラージンの反乱　それは『農民戦争』だったか」のなかで、ラージンの反乱が農民戦争ではなかったことを明確に述べている。反乱における二つの中心は、コサックとヴォルガ川中流の少数異民族である。コサックは、たとえ以前農民であったとしても、生活はすっかり変わっている。それに対して、自発的に反乱に加わったのは決して数が多くはない一部の農民である。他方で、少数民族の反乱参加はこれまで以上の研究が必要である。要するに、ラージン反乱は、農民的性格をもったものではないということを、ホダルコフスキーはいいたいのである[6]。

土肥恒之は、日本では珍しいといえる『ステンカ・ラージン』の単行書のなかで、ホダルコフスキーの、コサックと農民との「明確すぎる」区別を、批判している。それは、「別の誤解に導くことになりかねない」。コサックの多くは、特に反乱に加わった新参のコサックには、ロシア国内に親族を持っていたという事情を考えなければならない。ドンで１０年、２０年暮らしたコサックでさえ、ロシアで生涯を全うする者もいたのである。「魅惑の書」の文言は、当時それを聞いた農民がその意味を理解するのに時間はかからなかった。ラージンの反乱は、後進的なロシアの「農民戦争」と呼ぶことができるのである、[7]と。

しかし、当時のコサックは独立した存在ではなかったか。土肥自身が、『ステンカ・ラージン』の特に前半で書いているように、逃亡農民と下人はドンの領域に逃げ込んだ場合、コサックは彼らを「ドンから引き渡さない」という不文律を政府との間に確定していたのである。コサックは生計の資のために、オスマン帝国の支配下のクリミア・ハーン国へ略奪遠征へ行くことがよくあった。コサックはツァーリの家臣ではないが、オスマン帝国との関係で味方にできる存在でもあった。オスマン政府はドン河口にある要塞アゾフを強化してドン・コサックの海への航行を阻んだ。これに強く反発したコサックは１６３７年にアゾフを急襲・占拠した。このころから、コサックに対するツァーリ政府の物資提供が毎年続く。１６４１年、オスマン帝国の大軍がアゾフに向けて派遣された。苦戦したコサックは、アゾフをツァーリに献ずる代わりに、モスクワ政府に軍の派遣を求めた。だが、ポーランドとの敗戦間もない政府には、強敵との新たな戦争に入ることはできず、翌年、コサックにアゾフ放棄の指令が届く。こうして、コサックとモスクワの関係は悪化するのだが、それでも逃亡民を「ドンか

ら引き渡さない」という不文律は両者の対立をはらみながら何とか持ちこたえていたのである[8]。したがって、一般の農奴とコサックとの間にははっきりした違いがあったと言えよう。

次に、なぜラージン軍がどういう勢力を味方にしたのかを考えてみよう。ラージン軍が１６７０年の春には、４０００人に増大し、モスクワとチェルカッスク（富裕コサックの拠点）に対する憤懣に燃えていた。ラージンの運動は一つの変化を遂げていた。つまり、彼の部下は盗賊団から反乱軍への変化を遂げていたのである。ラージンの行動の社会的な意味は、すでに士官や役人を殺害したことのなかに、また、兄弟として歓迎する貧民とは戦わないという彼の宣言のなかに表明されていた。このあたりでラージン軍が、貧困なコサックばかりではなく、没落しつつある都市と農村の大衆が、群れをなしてラージンの運動に流れ入ったことは、十分に自然なことである[9]。この時点で農民が反乱に加わるのである。コサックを一段低く見ようとするソ連史学では、繰り返しになるが「農民戦争」におけるコサックの運動を蜂起の「起爆力」とか「火付け役」と見ており、蜂起の主体はあくまで農民としている。しかし、コサックの運動を反乱の副次的要素としか見ない視点を取り続けることは難しいように思われる。

また、ソロヴィヨフは、『ロシアの一揆の解剖学　ステファン・ラージン』のなかで、前とのつながりを消さずに置くためか、「農民戦争」という言葉を何十回も用いているが、それとは異なる文章をひそかにその本のなかで書いている。すなわち、「蜂起軍のかなりの部分を編成したのは、自己の行動において農民よりも団結し、徹底的な都市の住民であった。彼らは積極的かつ精力的に行動し、自己のイニシアティヴでラージンのアタマンたちおよびラージン自身と結び付き、支援を約束しながら蜂起軍を市内に呼び集めた[10]」。

（２）政府軍の革新―西ヨーロッパから伝わった軍事教練

最後に乱雑ながら、ラージンの反乱の本隊が政府軍に敗北する、１６７０年秋のシンビルスクの戦いと、それに関して政府軍の革新―西ヨーロッパの軍事教練という大発明（私はこれについては全く知らなかった）がロシアに及ぼした影響―の可能性について論じたい。

１６７０年７月２０日、ラージンはモスクワを見据え、ヴォルガ上流を目指した。繰り返しになるが、反乱を支持した民衆は、少なくとも初期の段階では都市に多かった。ラージンは、上流に進むにつれて、全力を挙げて農民の支持を求めた。何千という農民がラージンの呼びかけに応じ、ヴォルガ川流域の各地で反乱が燃え盛った。

さらに、ヴォルガ川流域の多数の非ロシア人がラージン軍に加わる。彼らは、自分たちの土地に、ロシア人が進入してくることを嫌がっていた。特にモルドヴァ人、マリ人、チュヴァシ人らの少数民族はほとんどが農民であり、その土地がロシアの士族、教会、タタールの貴族らによって没収されてきたのである。定住性が強いこれらフィン系とは異なる、バシュキール人、カルムィク人、タタール人のような半遊牧民もラージン軍に交じっていた。しかし、バシュキール人は、この時は、居住地も遠く、あまり反乱に参加していない。カルムィク人、タタール人の大部分もコサックには敵対的だった[11]。

１６７０年の盛夏、ラージンは成功の頂点にあった。アストラハンはすでに彼の手中にあり、チョールヌイ・ヤール、ツァリーツィン、サラトフ、サマーラ等も無抵抗で城門を開いていた。９月中旬、彼の伝説的な武勇伝と「魅惑の書」は、２万人の雑然とした軍団を作り上げていた。政府の側では、アストラハンの大敗のあと、ラージン軍制圧のため全国から徴兵した。その総司令官に任命されたのが、ドルゴルーキー公であった。彼の軍隊は主として士族の騎兵隊によって編成されていた。手持ちの歩兵は優秀であった。ある者は外国人士官の訓練（注意すべきである）を受けていた。しかも、彼の軍隊は最新の銃と大砲を装備していた[12]。

ドルゴルーキーはモスクワを出立した９月１日には早くもシンビルスクに迫っていた。シンビルスクは、ヴォルガ川の流れがモスクワに向かって西に屈曲するカザンの前方では、最後の重要な要塞であった。１６４８年、アレクセイ帝が建設したシンビルスクは、堅固な天然の要塞を誇っており、町を圧する高台に要塞が築かれていた。ここの地方長官ミロスラフクキー公は、有能な士官かつ行政官であり、その守備隊の兵士は彼に対して忠実だった。シンビルスクに逃げ込んできたほかの地方長官や貴族同様、４つの銃兵連隊は彼の意のままであった。だが、最も心強かったのは、バリャチンスキー公の部隊であった。バリャチンスキーは４年前B.（ヴェー）ウスの軍団を蹴散らした士官であり、猛スピードで旅を続け、反徒たちよりも４日早く、８月３１日にシンビルスクに到着していた。

ラージン軍は、シンビルスクの防衛側の４倍の数に達していた。しかし、経験豊富なコサックと銃兵の主力は別として、それは装備の貧弱な、全体としては訓練と軍紀に欠ける烏合の衆にすぎなかった。ほとんどの者が自主的に参加していたが、なかには殺すと脅されて加わった者もいた。彼らの武器は、棍棒、槍、鎌、斧、熊手、杖、石ころなどという変わったものであった。彼らは酒に目がなく、やたらに略奪を好む、まるで信頼のおけない連中であり、正規軍を前にするとすぐ大混乱に陥った。しかし、こうした欠点も、その数によってある程度補うことができた。さらに重要なのは、地

方住民の支持を得たことである。

シンビルスクの攻防はずっと続いた。１カ月に及ぶ包囲の時が、ラージンの反乱の頂点であった。ラージンが４回目の攻撃の準備を整えていた時、１６７０年１０月１日、バリャチンスキーが元気潑剌たる、武装完備の軍隊をもってカザンから到着した。ミロスラフスキーは、１ヶ月間、要塞を奪取しようとする反徒たちの必死の攻めを撃退していた。つまり、その間にドルゴルーキーが軍勢を立て直しただけではなく、バリャチンスキーが戻ってくることを可能にしたのである。

ラージンは、バリャチンスキー接近の知らせを受けると、一部の兵力を要塞包囲の継続のために残し、６０００の分隊でこれを迎撃しようとした。しかし、ラージンの軍隊はヴォルガ川流域を席巻したときの軍隊とは違っていた。かつてはコサックと銃兵の強力な軍隊であったものが、今や農民、少数民族、船頭、囚人、それに近隣の町から逃れてきた浮浪者らが加わって、すっかり弱体化していた。その兵士らは、全く当てにならず、最初の攻撃では元気でも、すばやく勝利をものにできないと簡単に失望し、バリャチンスキーの選り抜きの軍隊にはとても歯が立たなかった。バリャチンスキー隊は、通常の騎兵と銃兵の他に、「ヨーロッパ風に訓練され、大型の拳銃と大砲を持った、ロシア軍の精華ともいうべき、ツァーリ直属の最強の連隊[13]」を引き連れていた。

バリャチンスキーが自軍の配置をしていたとき、反徒らはスヴィヤガ川を渡り、以前、政府軍から奪取した太鼓を叩き、喊声をあげて猛攻に転じてきた．しかし、この喊声もバリャチンスキーの大砲の轟音によってすっかりかき消されてしまった。砲弾は、敵陣の土を吹き飛ばし、大きな穴をあけた。農民と少数民族は、幼稚な武器を投げ捨てて、安全な川のほうに敗走した。コサックだけが必死に抵抗したが、やがて彼らも連続砲撃を受けて、退却せざるを得なかった。反徒の逃走が始まると、バリャチンスキーは竜騎兵に追撃を命じ、屍は累をなした。ラージン自身も手足を負傷し、勇敢なコサックが身を呈して守ってくれなければ、一命を落とすところであった。ラージンは戦場を離れた。その間、恐怖に取り付かれた数千の農民は、スヴィヤガ川を渡り、森のなかに逃げ込んだ。しかし、百名以上が捕虜になり、その場で処刑された。これがラージンの最初の敗北であった。

１０月４日になって、バリャチンスキーの勝利が確定した。この度も、彼の大砲と騎兵隊が反徒を狼狽させ、蜘蛛の子を散らすように遁走させた。全軍が壊滅状態になったなかでコサックは、騎兵の追撃を受け、船の停泊地に逃げ戻った。多数の船が転覆し、何百人もの反徒が溺れた。しかし、ほとんどのコサックが、ラージンもそうだが、農民や少数民族が死ぬのを見捨てて逃げた。バリャチンスキーは、捕らえた反徒には

容赦なかった。即刻報復行為が行なわれ、数百人の反徒が、吊るし首、四つ裂き、銃殺になった。他の者は、彼らの仲間への見せしめとして、筏の柱に縛り付けられたまま川下に流された。

これ以後、ラージンの勢力は弱まっていく。だが、ラージン軍と政府軍の差は何であったのか。「大型の拳銃と大砲」の有無は、確かに戦力の強弱を分けるものになったに違いない。しかし、それで十全といえるだろうか。W.マクニールの『力の追求』(高橋訳『戦争の世界史』)[14]を読んだ人なら、「否！」と答えるに相違ない。マクニールは別にラージンの反乱には全然触れていない。マクニールが発見した、オランダのナッサウ伯マウリッツ創始の軍事教練という大発明について是非とも学んでほしい。私はこの書を読むまでは軍事教練なるものについてほとんど何も知らなかったといってよい。

イタリア式築城術は西ヨーロッパの歴史にひとつの決定的な役割を果たした。大砲で攻められても壊れない防御施設が、イタリアから西ヨーロッパの他の地域に伝播し始めたのは、１５３０年代のことであった[15]。これ以後、西ヨーロッパの列強は互いに競いつつ強力な軍隊を育成させていくのである。１６１０年代、スウェーデン人とオランダ人が国際的な鉄製大砲の貿易を発達させた。さて、１７世紀初頭以前には、西ヨーロッパ諸国の軍隊の、来る日も来る日も行なうという教練の歴史は、存在したかしないかごく不確かである。ルーティン化した教練というものを最初に考え出した人物は、知られている限りでは、オランダのナッサウ伯マウリッツであるとマクニールはいうのである。マウリッツは、１６２５年に死ぬまでホラント・ゼーラント両州の総督を務め、オランダの他の五州の軍隊についても時期は異なるが総大将だった人物である。彼は大学出であり、数学と古典の教育を受けていた。低地諸邦でスペイン軍を相手に戦うという問題に直面した彼は、古代ローマの兵法家の著作から何らかの教訓を引き出そうとした[16]。

マウリッツは自分の考えを加えつつローマ時代の３つの事柄を強調した。それを詳述する暇はないが、（１）敵の都市や要塞を包囲攻撃する際に、兵隊たちにシャベルで壕を掘らせてそのなかに隠れさせる、（２）最も重要な技術革新として、組織的な教練（火縄銃の装填と発射に必要な動作の反復練習、等々）を発達させる、（３）軍隊をそれ以前の慣例よりも細かな戦術単位に分ける、である[17]。これがいかにすごい内容を持っていたかを知るには、マクニールの本を読むしかないが、丹念に訓練を積んだ戦闘単位は、意味のない一切の動作を排除することで、戦闘において敵に向けて発射される一分間あたりの銃弾の量を倍加させることができた。騎士的武勇や個人の勇気は、鉄のように動かし難いルーティンのもとにほとんど姿を消した。マウリッツ

式の教練を受けた部隊は、戦場ではほとんど自動人形のように敵に優先する威力を示した。さらに、集団を成す人間が、長時間にわたって拍子をそろえて一斉に手足の筋肉を動かしていると、彼らの間には原始的で非常に強力な社会的紐帯が、自然に湧き出すように形成されるのである。マウリッツと彼に続く何千という西ヨーロッパ諸国軍の教練教官たちが発達させた軍事教練というものは、この原始的社会性の貯水槽に蛇口をつけてじかに力をくみ出す仕掛けであった[18]。

ひとたび教練が兵士たちの日常経験となるや、西ヨーロッパ諸国の軍隊は、当たり前の決まりきった仕事として、世界市上でも異例な剛勇無双の戦いぶりを発揮するようになった。われわれは、本来ならばそれが引き起こすはずの賛嘆の感情を起こさない傾向があるが、それは驚くべきことである。わずか数十メートルを隔てて相対した敵味方が、どちらもがっちり横列を組んで、お互いにマスケット銃を撃ち合い、まわりじゅうで戦友が死んだり傷ついて倒れるのに、その横列を崩さずに頑張っているのである。１８世紀の西ヨーロッパの軍隊はそれを当たり前にこなしていた。このような、新しい巨獣を生み出したことは、確かに１７世紀の最大の達成のひとつであり、同時代の様々な分野での画期的前進に比べても、その最大のものである近代科学の誕生に比べてすら、重大事件だったといえるであろう、とマクニールはいうのである[19]。

マウリッツは１６１９年に、将校を訓練するための士官学校（ヨーロッパ最初）を組織した。その卒業生の一人は、スウェーデン国王グスタフ・アドルフのもとで服務し、オランダ式教練という新発明をスウェーデン軍に伝えた。スウェーデン軍から、教練は効率向上を望む西ヨーロッパ諸国の陸軍に、微修正されて普及した。プロテスタント諸国がこの革新を受容し、これら諸国からフランス軍へ伝わり、そして最後にスペイン軍が受け入れた[20]。

マクニールは、続いてロシアについて書いている。「東に目を移すと、最初の教練教本のドイツ語訳が出版されてから一世代遅れて、１６７４年にそのロシア語への重訳が出た。ロマノフ王家の軍隊はこのようにして西ヨーロッパの新展開に歩調を合わせようと企て、なおその後進性は歴然としていたにもせよ、それなりに頑張ったのである[21]」。マクニールのロシアについての興味深い話は残念ながらここまでだが、彼の注釈から米国人研究者Ｒ.ヘリーの『モスクワ国家における農奴化と軍事的変化』にロシア最初の教練教本のことについてのより詳しい説明があることが分かった。それによれば、１６４７年にロシア政府は、指導的な西ヨーロッパの軍事理論家マウリッツ公を基にいくらかの新資料を加えた、１６１５年刊のドイツ語教練本の翻訳を命じ、完全な翻訳は１６４９年に出た。ヘリーは、マクニールほどにはこの事件の重要性を強調していないが、この１６４０年代に竜騎兵、騎兵、銃身の三つの官署ができたと

いい、アレクセイ帝の統治の最初の数年間に同時代人の目から見て決定的な軍事的革新がなされつつあったことは疑いないとしている。１７１６年、ピョートル大帝も彼の父（アレクセイ帝）が１６４７年に（？〔原文のまま〕）軍事規則を出版し、これとロシアにおける常備軍の開始と結び付けている。単に軍事教練の本が出されたばかりではなく、それに伴う具体的措置がおこなわれたように思われる[22]。これが、シンビルスクの戦いに関係していないだろうか。ロシア語の書籍で軍事教練が詳しく述べられている所を探してみた。どこかに書かれているかもしれないのだが、残念ながら、まだ見出していない。

（１）阿部重雄『帝政ロシアの農民戦争』吉川弘文館、1969年、１ページ。ここで書かれているわけではないが、これらの反乱を農民戦争としている代表的なものに И.Смирнов. А.Г.Маньков. Е.П.Подьяпольская. В.В.Мавродин. *Крестьянские войны в России XVII-XVIII вв*. М.-Л., 1966; *Крестьянские войны в России в XVII-XVIII веков проблемы, поиски, решения.* М., 1974（論集）;В.И.Буганов. *Крестьянские войны в России XVII-XVIII вв*. М., 1976がある。

（２）鳥山成人、田中・倉持・和田編『世界歴史大系　ロシア史Ｉ』山川出版社、1995年、114ページ（注)。本の名前など書かれていないのだが、後者は А. Л. Станиславский. *Гражданская война в России XVII в.* М., 1990, С.247であろう。

（３）Avrich, *op.cit*., pp.23-24. 白石訳、30－31ページ。

（４）*Ibid*., pp.174-175. 白石訳、185－186ページ。

（５）*Ibid*., pp.119-120. 白石訳、135ページ。

（６）Khodarkovsky, *op.cit*., pp.1-19.

（７）土肥、前掲書、162－165ページ。

（８）同書、49－56, 86－91ページ（但し、「1636年」を「1637年」に修正)。

（９）Avrich, *op.cit*., pp.76-77. 白石訳、89ページ。

（10）Соловьев. *Указ. соч.* С.116.

（11）Avrich, *op.cit*., pp.89-91. 白石訳、102－105ページ。なお、A.Kappeler, *Russlands Erste Nationalitäten*, Köln, 1982, S.137-243 に16世紀の70年代から17世紀末までのヴォルガ川流域の少数民族の歴史が描かれている。特に、ラージンとこの地域の少数民族との密接な関係に関心を持つ者は、S.179-181に力強い記述を見ることであろう。Khodarkovsky, *op.cit*., pp.14-15も参照。

（12）以下、ラージン軍の本隊が完全に敗北してしまうまでは、Avrich, *op.cit.*, pp.97-110. 白石訳、112－125ページを中心に用いた。だが、Сахаров. *Указ. соч.*

C.235-301. 米内訳、242－308ページも読ませる。

(13) Avrich, *op.cit.*, p.102. 白石訳、117ページ。

(14) W.H.McNeIl, *The Pursuit of Power. Technology, Armed Force, and Society since A.D.1000,* Chicago University of Press, 1982. 高橋均訳『戦争の世界史　技術と軍隊と社会』刀水書房、2002年。

(15) *Ibid.*, p.91. 高橋訳、123ページ。

(16) *Ibid.*, pp.126, 128. 高橋訳、173ページ。

(17) *Ibid.*, pp.128-132. 高橋訳、173－179ページ。

(18) *Ibid.*, p,131. 高橋訳、178ページ。

(19) *Ibid.*, p.133. 高橋訳、180－181ページ。

(20) *Ibid.*, pp.134-135. 高橋訳、183－184ページ。

(21) *Ibid.*, p.135. 高橋訳、184ページ。

(22) R.Hellie, *Enserfment and Military Change in Muscovy*, The University of Chicago Press, 1971, p.188. また、P.ロングワースは1640年代のいくつかの軍事官署の創設と軍事教練の本の発行について述べたのち、「モスクワは、新モデル・アーミーを持つことになった」としている。P.Longworth, *Alexis. Tsar of All the Russias*, London, 1984, p.28.

おわりに

当時のロシアというものを十分に考えていただきたい。かなり無茶苦茶な状態にあったのではなかろうか。ポーランドとの戦争も国に深い傷跡を残していた。暮らしの見通しも立たなくなった下層コサックの先頭に、彼自身は富裕なコサックであるラージンは立ち、カスピ海を荒らしまわって、ペルシア軍にも勝利した。彼はアストラハンなど大都市とその周辺をおさえて、ついには貴族階級の本拠モスクワ打倒を目指して、貧困にあえぐ農民や少数民族を集め、中間の地点シンビルスク奪取に向かう。だが、ラージン軍は、政府軍—なかでも「ヨーロッパ風に訓練された」、「最新の武器を備えた最強の軍隊[1]」を引き連れたバリャチンスキー隊に敗北してしまう。ここでラージン反乱の運命は絶頂から奈落へと方向づけられるのである。

第１章では、ラージン個人の周辺的問題を扱った。すなわち、「義兄イヴァン」はいたのか、いなかったのか。私はいなかったという方が正しいと思う。次に「ペルシアの姫」の一件はどう解すべきか。最後に、アストラハン奪取の際のプロゾロフスキーの次男の運命である。いろいろ書き連ねたために、印象がかえって曖昧模糊としてし

まったかもしれない。しかし、解答は一つではなく、ひとまず沢山ありうること、ラージン自身の幅の広さが感じられること、などが得られれば良いのではなかろうか。

第２章は、ラージンの反乱の全体像の問題である。ロシア（旧ソ連）ではマルクス主義の影響が大きく、ラージンの反乱の主体は農民であるとして「農民戦争」の代表的なものとされることが多かった。米国のアヴリッチはやや曖昧なところがある。一方でラージン反乱は「１７世紀のヨーロッパの最大のジャックリーであった。したがって、不正確な点もあるが、『農民戦争』というレッテルは、ある程度、反乱の本質を突いている」と述べておきながら、他方で「ラージンの反乱では農民が大きな比率を占めていたが、コサックの役割もまた重要であった。彼らは、反乱の先鋒に立ち、最大の戦力になっていた[(2)]」と書いている。これに対し米国のホダルコフスキーは、少数民族がラージンの反乱の主体になっているという見地から、「農民的な性格をラージンの乱に帰するのは誤解を招く[(3)]」と主張している。

土肥はホダルコフスキーがコサックと農民について、「両者をあまりに明確に区別すること）は「別の『誤解に導く』ことになりかねない」という。そして、ホダルコフスキーを褒めたりしながらも、結局は「ラージンの反乱は、後進的なロシアの『農民戦争』と呼ぶことができるのである[(4)]」とのことである。土肥は、自分の本の前半でコサックと農民の明確な区別をしていたではないか。

私は今はアヴリッチとホダルコフスキーの中間的なところを取りたい。アヴリッチは農民革命にひかれすぎだし、ホダルコフスキーは実際に生じた農民の運動をどう見るのか、そこが知りたいところである。

最後に付け加えたのは、政府軍側の状況である。何げなく手に取ったマクニールの書が、ヨーロッパの軍事史を変えるマウリッツ伯の軍事教練という大発明を、それがラージンの反乱直前にロシアに伝えられたことを、教えてくれた。バリャチンスキー隊がどれだけそのお世話になっているのか、ぜひとも知りたいところである。

（１）Avrich, *op.cit.*, pp.102,106. 白石訳、117, 121ページ。

（２）*Ibid.*, pp.5, 119-120. 白石訳、14, 135ページ。

（３）Khodarkovsky, *op.cit.* p.2.

（４）土肥、前掲書、164－165ページ。